



新潮社/定価1,470円

1ショット写真を引きながら、「小さいことこそが素晴らしいと言える社会を築かねば、このまま永久に体の大きな欧米人たちに敗北し続ける」という「常套句中の常套句」を準備する。

## 『幼少の帝国』 阿部和重著

芥川賞作家であるのみならず、いまや現代文学を代表する書き手といっても過言ではない著者がものした初のノンフィクション。

全編を貫くテーマは、アンチエイジングと戦後日本という、一見すれば関連がなさそうにも思える事柄だ。著者は昭和天皇とマッカーサーのツ

そこから美容整形、省エネ小型化技術、デコトラ、仮面ライダーなど多様なモチーフを用いつつ、「成熟拒否」と現代日本との関係を浮かび上がらせる手つきは作家ならではの。

ならば日本は、はたして青春年期を迎えられるか。昭和の敗戦とバラレルに語られる東日本大震災を目標し、そこから災後の処世術までを射程に収めた野心作。(T・F)



共同通信社/定価999円

## 『東京スカイツリー 万華鏡』

共同通信社編

東京スカイツリーの魅力とは何か。天野祐吉氏との対談で谷川俊太郎氏が漏らした言葉「東京にはアジア的混沌がちゃんとある」をヒントにすれば、未知なる高さから東京という街を眺めることで、新たな「気づき」を得られることだろう。「行くのはもう少し空いてから」と思っている人でも、いまずぐ足を運びたくなる一冊。(T・N○)



講談社/定価1,785円

## 『ネットと愛国』

安田浩一著

日本最大の「市民保守団体」である在特会（在日特権を許さない市民の会／会員数約一万人）。そこに集うのは、いまだきのごく普通の若者だった、というのが本書の眼目。もてない、カネがない……青春期に誰しもが抱くだろう不遇感。在特会はそれを巧みに吸い上げる。日本社会に漂う「絶望」を見事に活写してみせた傑作。(T・N△)

## 『ブーチン 最後の聖戦』

北野幸伯著

「サブプライム問題」「リーマン・ショック」「百年に一度の大不況」——これらを受けて多くの人が「米国一極集中の時代」の終わりを予感している。では、なぜそうなったのか。「米国は没落させられた」と著者はいう。そしてその張本人こそがブーチンなのだ、と。いつけん、陰謀論

のように思えるこの論を、本書では「新聞に載っている情報」をもとに明快に読み解いていく。

冷戦崩壊後、ロシアはどんな状態から這い上がってきた。その復活の立役者がブーチンだ。彼はいかなる人物なのか、いかに国内で権力基盤を確立し、ロシアの国際的な存在感を高めてきたのか。その人物像と、ロシア外交のリアリズムを知れば、世界は「戦争がつきもの」という現実と、日本存立の危うさが理解できる。

ブーチンが大統領に返り咲いたいま、ロシアは米国に「とどめを刺しにくる」という。今後の世界を見極めるに必読の書。(E・T)



集英社インターナショナル/定価1,680円

## 『呼ぶ山』

夢枕 獏著

山を愛し、山をモチーフにした数々の作品を生み出してきた著者の山岳短編集。書き下ろしの表題作のほか、七編の過去作品が収録される。山に魅せられ、呼び寄せられるように山に足を踏み入れた登山者たちの、どこか不思議な幻想ともとれる世界観は巧みだ。ミステリアスに蠢く「山の気」を、圧倒的な筆致で描き出す秀作。(M・T)



メディアファクトリー 定価1,785円

## 『新・東京圏 これから伸びる街』

増田悦佐著

人口一千三百万人を擁するメガロポリス東京。一大集積都市が誕生した理由は「都市計画の不在」にある、と著者は指摘する。「意図的に作った街のつまらなさと、なんとなくこうなってしまう街のおもしろさ」。本書はそうした魅力ある街を十五カ所選び、写真とともに生き生きと紹介する。街歩き、住まい選びに必携だ。(T・S)



PHP研究所/定価1,575円